

「主イエスの目線で生きる」

使徒言行録 2 章 36 - 39 節

森島 牧人 牧師

先回は十二弟子の中でもちょっとユニークなトマストマスの小さな叫びのような信仰告白について学びましたが、私がここで注目するのは、主イエスに対する信仰告白によって新しい群れとされた弟子たち、いわゆる信仰告白共同体のその後のことです。つまり、バプテスト派である私共バプテスト教会では、自分の口で信仰告白をし、浸礼を通して信仰告白共同体の群れの中に入ることになります。浸礼によって主イエスと共に死に、主イエスと共にもう一度新しい命に生きる、この信仰告白共同体がバプテストです。その意味ではペトロペトロやトマスのいる信仰告白共同体こそが最初のバプテスト（歴史的には 17 世紀）であったと言えます。

復活された主イエスは 40 日の間弟子たちの前に現れ、＜神の国＞について詳らかに説かれた後、聖霊の降臨を予告して天に帰られました。残された弟子たちはひたすらその時を待つこととなります。その聖霊降臨は過越し祭から 50 日後の五旬祭の日にかかるのですが、ここで私はこの時の弟子たちの有り様に注目したいのです。復活の主を信じ、それぞれの信仰告白を持った群れとして 40 日間主と共にいたはずの弟子たちが、なぜ主の昇天後もなお人々を恐れ、隠れ家に閉じこもって聖霊降臨の時を待ったということですか。どうして彼らは暗闇の中で怯えながら祈っていたのか。周りの人々は彼らの有り様を訝しく思ったことでしょうか。つまり外からは彼らの姿は何も見えないからです。しかし、これが最初の主の群れの姿です。

そんな彼らに聖霊が降ります。ペンテコステです。その時弟子たちは初めて主イエス・キリストの出来事のすべてを、その意味をはっきりと理解したのです。イエス・キリストは神でありメシアであること、そして父なる神の意志（愛）を全うされたのであること、さらにイエス・キリストによってのみ人は生き、成長し、主と共に歩むことが出来ると分かったのです。

さて信仰が成長するものであること、私共の霊の眼は順序を追って開かれて行くものであることは、このことから分かります。その点で教会生活は非常に大切です。つまり一度は閃いてトマスのように叫んで信仰告白共同体の群れに連なったとしても、後が続かないとしたらどうしようもありません。

私共は信仰生活に於いて鈍く、霊的感覚の薄い者です。しかし主は、そんな私共をお捨てにはなりません。確かに主は私共に常に信仰告白を求められる方ですが、一方では非常に忍耐強い方でおられるからです。

教会とはそのような私共が集まっているところですが、教会の使命とは一体何なのでしょう。キリストは何のために教会を建て、その真ん中にお立ちになっているのでしょうか。

教会の使命、それはキリストの救いを宣言すること、そしてキリストが私共の罪を贖い、私共に命を与え給うたことを、一人一人が会得し、それを自分の言葉で人々に伝えることです。従って、私共の宣教が弱いとするなら、それは罪の赦しの体験が薄いからでしょう。主の十字架と復活に与り信仰告白をした私共も、復活の主イエスと出会いながら人々から逃げていた弟子たちと同じ、閉ざされた群れだからです。私共の教会が、主イエス・キリストが真ん中におられるキリストの体なる教会に、外からも見える開かれた教会に変えられるには、弟子たちと同じように、ペンテコステの出来事に与る必要があるのです。それにはどうすればいいのか。それは発語すること、すなわち宣教に出て行くことです。

聖霊が降ると弟子たちは隠れ家から出て、集まっている人々のそれぞれの国の言葉で話し出しました。酒に酔っているのではと怪しむ人々にペトロは「今は朝の 9 時です。・・・ナザレの人イエスこそ神から遣わされた方です。・・・」と語ります。そして「自分たちはどうすればいいのか」と問う人々に「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によってバプテスマを受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。・・・」と答えたのでした。（使徒 2 章）

ペトロが語ったように、信仰告白共同体からペンテコステの出来事に与った教会へと変えられて行く、それは＜主の目線で生きる＞ということですか。つまり信仰告白共同体である教会が、派遣される教会、宣教する教会へと変えられて行くのです。天に戻られる時、主イエスは「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によってバプテスマを授け、あなたがたに命じておいたことを守るように教えなさい。」（マタイ 28：18-20）とされています。この主の命令に生きる教会として、私たちは歩んでまいりたいと思います。

（説教要約 羽入田悦子）